
シル学発売記念（遅め）

クルネルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シル学発売記念（遅め）

【Nコード】

N9316T

【作者名】

クルネルク

【あらすじ】

シル学発売記念作品！転生チートと勘違いした男はこの世界で何を為すのか？ネタばれを多少含みますのでご注意ください！

Q、シル学？A、SilverSecond（<http://www.silversecond.net/>）の管理人SmokingWOLFさんが製作されたシェアウェア（¥2000）

（前書き）

勢いで作った、後悔はしていない、ネタばれ解禁日がよく分からないので、あまりネタばれしない程度に。

「あーだりー、何か面白い事でもないかなー」

俺の名前は平松 陽平、ごく普通の高校生、ちょっと違うところを挙げると思えばオタクだってことかなー。

「げ、赤じゃねえか、碌に通らねえのに長いんだよなあー、いいや、渡っちまおう」

だけどそれは大いなる間違いで、気付いた時には俺の目の前に車が居たわけで。

ナニカが潰れたような音と共に俺の意識は黒く塗りつぶされていくのだった。

「意識の海に漂うそのあなた・・・私の声が聞こえますか・・・」

俺の意識を戻したのはそんな声だった。

「まず、あなたの性別を教えてください」

何を言っているのだろうか？

「俺は男だ」

「あなたは男の人なのですね・・・では、あなたの名前は？」

「陽平」

「ヨウヘイさんですか」

ちょっと待て、俺は死んだはずじゃ？だったらこれは・・・転生つてやつか！

「あなたには１年後に起こる「災い」を防いで欲しいのです・・・お願いできますか？」

「あ・・・ああ、かまわねえ」

「ありがとうございます・・・では次にあなたに力を貸してくれるトータルテムを選んでください」

もしかして、転生チートつてやつですかー！

「じゃあ、狼で」

「トータルテムはファングですね」

「よろしく頼む」

「OK」

「では、あなたをシルフェイド島に飛ばします」

俺の転生ライフの始まりだ。

4 / 2 0

「畜生、何で上空に飛ばすんだよ、しかも落ちたところは何か変なおっさんが居るし・・・」

「まあ、歴史に干渉し過ぎないためだからな、それに鍛えられると考えれば悪くあるまい」

「それにしても何だよあの褐色ロリ、強すぎだろ」

「（褐色ロリ？・・・フォルテという娘か）まあ、いい目標が出来たと思え、鍛えれば彼女を超える事も出来るぞ」

「俺はそんな汗水たらすより、女の子とキャツキャウフフしたいんだー！」

「（キャツキャウフフ？）ヨウヘイ・・・後ろを見てみる・・・」

「いったい何が・・・げえっ！ロベルト！」

いつの間にやら俺の後ろに居候先の家主のロベルトが居た、白髪の中年男性でむちゃくちゃ強い、俺が落ちてきたとき、それをキャツ

チした拳句、俺を天が与えた後継者だと思い込んで俺を鍛えようとしてくる、おかげで週二回は地獄だ。

「女にうつつを抜かしたいとは腑抜けておるな貴様！！その性根たたきなおしてやる！！」

「ちょ、ちよつとWait！」

「問答無用！！」

アッー！

5 / 18

あまり人の居ない雑貨屋に俺はやってきた、そこには天使が居た。

「可憐だ・・・」

「え？誰？」

俺はその子の手を取り言った。

「俺をお兄ちゃんと呼んでくれ！」

「お、お母さん、助けてー」

「いったいどうしたの?」

「義母さんと呼ばせてください!」

「店内でそういうことは控えてください」

「だがしかし!俺の情熱はそんなことびゃ!」

「ウチのウリユに何しようとしているのかしら?」

突然出てきた女に殴り飛ばされた。

「タマお姉さん!」

「大丈夫?ウリユ、変な事されてない?」

「お客さん、ウリユに迫っていたんですよ」

「そう、じゃあ有罪ね、狐狩さん呼ぶわ」

「ちょっと、M A T T E !俺はただ愛に生きてただけで」

「そういうことは公安で言いなさい、もしもし狐狩さん?いま変態が・・・」

「NO――!」

「おとなしくお縄につきなよ」

そんな中俺に話しかけるヤツが居た。

「うお！何だこのレッサーパンダ？」

「アライグマのトーテムのラクーンだよ、ファングも大変だね」

「ああ」

「じゃあ、このタマって女も」

「サラによって召喚されたのさ」

「なん・・・だと・・・」

俺だけじゃないだと・・・。

「公安よ！タマちゃん変態はどこかしら？」

「こいつです！」

この女も好みだ・・・

「俺のよるのぶべらびゃ」

「ウリユの前で何を言おうとしたのかしら？」

「何しやがるこの暴力女！お巡りさん、この人捕まえて！」

「捕まるのは貴方よ」

「何でトーテムがファングなのにあっさり吹っ飛ばされているの？」

「あいつは鍛えていないんだ・・・」

「じゃあ、役立たずじゃん」

「言わんでくれ・・・」

「じゃあこの全ての女の子を愛したいという思いは如何すればいいんですか！」

「自分で考えなよそんなこと・・・」

「大体なんで取調べが野郎なんだ！」

「狐狩さんが「女性だと口説きにかかりそうね」って言ったからだよ」

「ちきしょう！」

そのとき取調室のドアが開いたと思うと、狐狩さん（婦警）が来た。

「もう帰っていいわよ」

「え？やった！」

もうこんなところはおさらばだー

「貴様、あれほど鍛えたのに、女にうつつを抜かして、公安の世話になるとは言語道断！」

「お、おおおお落ち着きましょう！ロベルトさぁん！」

こうして俺の長い1日は終わった。

6 / 1

俺は今、俺が所属する武術運動部（通称、武運部）のマネージャーのメアリーにアタックしている。

「メアリー！俺の全てをマネージメンとしてくれ！」

「え、あ、あの、こ、困ります」

「さあ！」

「そこ！何をしているのですか！」

ナダ先輩が邪魔をしてきた。

「嫌がっているのが分からないんですか？」

「な！？」

「そのような不埒な真似、許しませんよ」

「いや、俺は愛を言葉に「俺の娘に何してやがるー!」「ぎゃぼー!」

「お父さん!」

「エージス先生」

「死にてえ見てえだな、殺してやるよ!」

「落ち着いてください、先生、ん?あれは・・・」

「ろ、ロベルト、助けて!」

ロベルトはここの教頭だ、何とかなるかも。

「エージス、ソイツは私の家で預かっているやつだ」

「こいつはメアリーに・・・」

「だから思いっきりやれ、私も手伝おう」

神は死んだ。

「じゃあ、遠慮なく・・・」

いやー!

街を歩いていたピンクドリルに声をかけたが。

「私、三次元に興味ないんで（ピンクドリル言うな）」

「えー」

7 / 4

カラアゲを欲しがっている女の子が居たので。

「奢ってあげるから俺とカラアゲ巡りのデートしない？」

「も、物で釣ろうとは卑怯ですよ！・・・でも・・・」

「その人、なにやっているんですか！先輩も悩まないでください
！」

「ちっ、失敗か・・・」

7 / 27

シャワー室に入ると誰かが入っていた、ここは男女兼用である、女が居れば御の字、男が入っていても何もおかしい事ではない！いざ！突撃！

「おや、あたしの裸が見たいのかい？」

入っていたのは老婆だった！

「ぐあー！目がー！目がー！」

8 / 15

公園に行くと、儚げな雰囲気を持った女性が居た。

「お嬢さん、俺と海を見にでも行きませんか？」

「いえ、すみません・・・」

「そんな事言わずに・・・」

そうしていると、この娘の弟と思われる者とバンダナを巻いた不良っぽい人物が来た（接点が見えない）。

「姉さんに何しているんですか」

「おまえ、タマやセトが言っていたナンパ男だろ、一寸署まで行くか・・・」

どー見ても不良なのに公安かよ。

「ほっとけ」

あれ？声に出てた？

「つー訳で、俺はこいつを突き出してくるから、姉弟水入らずで楽しんで来い」

「すみません、ガゼルさん」

「気にすんな、さあ、いくぞ」

「いやー、もうロベルトはイヤー。」

「自業自得だヨウヘイ」

9 / 8

「その額の赤い宝石のついた方、俺と遊びませんか？」

「え？ああ、ナンパですか、でも私心に決めた人が居るんです」

9 / 28

「お水みたいに色気振りまいてるくせに！」

「超重力で、潰れなさい！」

11 / 1

金髪に黒い服の女性を誘うも。

「いつこいんだよこの野郎！」

股間を蹴り上げやがった……。

12 / 24

銀髪メガネの娘とポニテオッドアイの娘が居た。

「ねえ、暇？あそぼうよ」

「すでに相手が居るので断る」

くそっ！女二人だからいけると思ったんだが！

「悪い、待たせた」

「ポチさん！アナスタシアさんと話していたから大丈夫ですよ」

男が……一人？

「そうだ、問題ない、さあ行こうポチ、アウル今日は遊ぶぞ」

つまり、ハーレムってやがるのか？

「ヨウヘイどうかしたのか？・・・ってアウル！？お前どうしたんだその姿？」

「ファングさん？じゃあこのナンパしてきたのが、あのヨウヘイさんですか？」

「あの」がなにをさすのか分からんがおそらくそうだ」

「こんな人で大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃない、お前らともう一人が頼りだ」

「強く生きてください・・・」

「ハーレム野郎は・・・」

「どうしたのだヨウヘイ？」

「ぶっ殺す！」

「！！ポチ！気をつけろ！」

「ぶっ死ねえ！」

「多段撃！」

ドウブツハア！

「どうします？この人」

「とりあえず公安を呼ぼう」

俺の意識が遠くなりながらそんな会話を聞いた……。

「貴様は何度公安の世話になるのだ！」

「げえっ！ロベルト！」

「竜王の舞！」

うわあああああああ！

3 / 3 1

「この一年、女に縁が無かったなあ……」

「自業自得だろう……」

「でも、来年こそは！女の子と……」

「何を言っている？来年は無いぞ」

「はあ！」

「災いを防ぐためにやってきたのだから、災いが起きずに1年たつ

たら消えるに決まっているだろう」

「一寸待て！災いなんて・・・」

「他の二人が解決してくれたぞ」

「そもそもなんで消えなきゃ・・・」

「サラにも限界はある、1年活動できる肉体が精一杯だったのだ、しかもお前が情けないから無理してもう2人派遣したんだ」

「じゃあ、俺ってば何も出来ぬままに、消えちまうのかよ！」

「親しかった者に別れを告げる事も出来るが、あの2人は告げて消えたが、お前には相手が居なかったな（笑）」

「最後にふざけたと思えば馬鹿にしゃがって！ちくしょー！」

その言葉を最後に俺の意識は還っていった・・・。

「まあ、お前と居た1年退屈はしなかったな」

（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9316t/>

シル学発売記念（遅め）

2011年10月8日19時04分発行